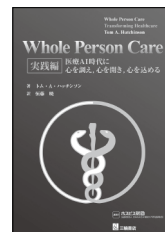


Tom A. Hutchinson (著), 恒藤 暁 (訳)

Whole Person Care 実践編

医療 AI 時代に心を調え、心を開き、心を込める

三 木 恵 美
(関西医科大学, 作業療法士)



Whole Person Care と聞くと「全人的ケア」のことだと思う読者は多いだろう。しかし、従来の「全人的ケア」と本書で述べられる Whole Person Care は根本的に異なるものだそう。では Whole Person Care とはいったい何なのか。

人は病気になると2つのことを求める。1つは治る病気が治してもらうこと。もう1つは1人の「全人 (Whole Person)」として対応してもらうこと。Whole Person Care とは、「科学的根拠に基づく医療」と「癒し」、すなわちロゴス (論理・論証する言葉・理性) とミュトス (人が語る物語・空想)、Science と Art, 標準化と個別化、の統合である。

この数カ月、私は高校生、保護者、高校教師を相手に「作業療法とは何か、どんな魅力があるか」を説明する仕事をしている。短い言葉で明快に伝える必要があるため、「作業療法とは何か、どんな魅力があるか」をあらためて自問することとなった。そのような時期にこの本を読む機会を得て、私の中に長年巣くっていた硬い氷が融けるような感覚があった。

本来、「科学的根拠に基づく医療」と「癒し」は対立するものではない。しかし、科学的根拠を求める研究者、OT の姿勢は、標準化や客観性を求めるあまりに、画一的であったり患者の個性を見逃したり、温かみに欠けていると

批判されることが少なくない。一方で、患者の人生の物語を大切にした実践、患者にとって価値のある作業に焦点を当てた実践は、非科学的と批判を受けることがある。どちらも作業療法にとって必要なのに、どうして反発し合うのだろうか。この潜在的な対立関係は、私の心の中にわだかまりとして長い間存在している。

作業療法の強みの一つは、医療・保健の専門職だということだ。医療・保健の専門職であるからこそ、疾患や障害を抱えた人々に近づき、触れ、うまくいけば治すことができる。医療専門職である以上、科学的根拠を求められるのは必然である。ここを怠れば、作業療法は自滅してしまうだろう。

作業療法の魅力のもう一つは、「癒し」との親和性の高さにあると思う。これは他の医療職にはない、特別な魅力ではないかと私は思っている。作業療法には、人を「全人」として理解し、かかわろうと努めてきた文化がある。病気になると、病気になる前の自分と人々との結びつきが奪われてしまうので、「癒し」には結びつき (Connection) が必要となる。本書では2者間の結びつきを深める練習として、2人が一緒にケーキのデコレーションをするというエピソードが紹介されている。これは、患者と作業との結びつき (Engagement) を大切にする作業療法、患者と家族と一緒に同じ作

業に取り組む作業療法の場面と、非常に類似していると思う。

「科学的根拠に基づく医療」と「癒し」、両方があってはじめて作業療法が魅力ある仕事になるはずだ。互いに補完し合うべきこの両者が対立してしまうのは、作業療法の世界だけではないらしい。それを統合しようというのがこの Whole Person Care である。

作業療法士養成課程において、「科学的根拠に基づく医療」のための教育は充実してきているように思うが、「癒し」に関する教育は十分ではないように思う。実際、私自身「癒し」ができるか否かは、OT 自身の資質にかかわる部分が大きいと捉えていたところもあって、きちんと術を学んでこなかったと思う。しかし、本書では、腎臓内科医である著者が経験したさまざまなエピソードや医学生への教育を紹介しつつ、「癒し」の医療をどう育てるか、どう展開するか、を具体的に紹介している。作業療法においても、「癒し」の教育・実践について学ぶことは多い。本書は、緩和ケアや終末期にかかわる OT のみならず、いかなる時期であっても、患者の人生にかかわるすべての OT に読んでもらいたい1冊である。

A5判 212頁 2,000円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357